

日本語『能・ハムレット』初演台本（初稿）

NOH HAMLET in Japanese: Script for the Premiere

上田 邦義

UEDA Kuniyoshi

Abstract:

The following is the script of *NOH HAMLET in Japanese* by Kuniyoshi UEDA written for the world premiere at Nihon University Casals Hall in Ochanomizu, Tokyo on 2nd December 2004. The play will be produced by Nihon University as one of its “Academic Projects” for 2004. It will be the realization of the proposal by modern Japan’s greatest author, Soseki NAITSUME: “Noh adaptation of *Hamlet*” in 1911; and will be co-directed by Hideo KANZE, Manzaburo UMEWAKA, and Kuniyoshi UEDA. The uniqueness of this script is the creation of the cemetery superintendent in place of the grave digger in *Hamlet* as a most spiritual type of man. This role will be performed by the famous kyogen actor, Mansaku NOMURA, who will sing: “To be or not to be, is no longer the question,” which has been sung by Hamlet in *NOH HAMLET in English* acted by Kuniyoshi Munakata UEDA since 1981.

以下に掲載するものは、来る平成十六年十一月二日（午後七時より、東京御茶ノ水の日本大学力ザルスホールで初演予定の日本語『能・ハムレット』台本（上田邦義作）の初稿（平成十六年八月）である。この公演は、平成十六年度「日本大学学術研究助成」によるプロジェクト「東西舞台芸術の異文化融合先端研究」創作能ハムレット、日本大学力ザルスホール上

演（研究代表者 上田邦義）として行われるものである。

中ほどの「間（マヒ）狂言」の部分はまったく私の独自のものであるが、その他に関しては特に演出や囃子に関しては、八田達弥氏その他数名の方々のご協力をいただいていることを御礼とともにお断りしておく。新作能といつものがどのようにして作られてゆくものか、多少記録にとめておくも価値あることかと思ひ、この初稿をここに掲載するのであるが、公演までにはまた約二カ月の期間があり、その間の打合せ・稽古・申合せを経て、初演当日までにこの台本がどのような進化または変貌を遂げておるか、予想しがたいところがある。

演者には、誠に光栄なことに、和泉流狂言方の野村万作師、また梅若万三郎師率いる梅若研能会の能楽師諸氏、また囃子統括として大倉流大鼓方の大倉正之助師、その他錚々たるメンバーに出演御快諾をいただいた。特に、野村万作師には、実は師を念頭に、シェイクスピア原作の「墓掘り」を「墓守」に改作した経緯もあり、台本をお読みいただいてこれを受けていただけたことは、大きな喜びである。「即天去私」の夏目漱石先生も喜んでおられるであろう。私の翻訳では「宇宙のいのちにつながる」となっている。万作師の墓守りがどんな風に歌ってくださるか、まことに楽しみである。

またさらに演出には観世栄太郎・梅若万三郎師という望み得る最高の方々にご快諾いただき、二名による共同演出といつことになった。この上ない光栄である。

シェイクスピア劇と能との融合。夏目漱石が一九二一年、坪内逍遙の『ハムレット』、「翻訳劇」を帝国劇場で観、その劇評（『東京朝日新聞』明治四十四年六月五日・六日号）にシェイクスピア詩劇の能「翻訳」を提唱した。それから九十余年。いま二十一世紀の新たな芸術として、『ハムレット』を能に翻訳するに際し、どのような未来創造的な芸術体験・美的価値として実現することができるか。さらにカザルスホールという西洋音楽のためのホールでの演能である。能もシェイクスピアホールも生かすにはどのような調和と融合が望ましいか。

二十一世紀は「共生」の世紀である。世界中のすべての民族、すべての文化を尊重し、その共存を図りたい。人類の精神進化の方向を、その見定めて飛翔したい。これは今日の緊急の課題ではないか。十二月二日の公演が、そのひとつの提言となることを願っている。

能・ハムレット (初稿) 上田邦義 作

資料(原曲) W. シェイクスピア『ハムレット』

曲柄 四番目

季節 春

所 デンマーク

道具 十字架(中に電球をいれ、光量可変とし、

天井から吊るす)

「構想」

(前場) 諸国を巡っていたホレイシオが徐々にデンマークに帰りオフィーリアの墓を訪れると、里人と称する男がハムレットのせりふを口ずさみながら現れ、一面に咲く菫の花やオフィーリアのことをホレイシオと問答するうちに、「尼寺へ行け」とは清らかに生きてくれという愛の表現だと語り、彼女が入水して亡くなったことを悲しみながらも、「生死は最大の問題」ではないと言って消える。

(間語り) 墓守りが、「この世の醜態わかってきた」と語りながら登場し、オフィーリアの葬儀のあとハムレットと思しき姿が彼女の墓前に現れたと語り、「この世もあの世も本当のこの世」と語りながら退場する。

(後場) 墓所近くの川面にオフィーリアの霊が浮かび出、次いでハムレットの霊が現れて「生死」やまことの愛について語り、人類の精神進化こそ最大の問題であり、調和と融合による共生が必要であることを説き、「幸せに優るものなし」と万人の「寿福」を祈って舞い、やがて天使の飛翔に導かれて光の国へ去ってゆく。

「登場人物」

前シテ・卑人（直向 墓守を連想させるため、またハムレットが父王のために着ていた喪服を連想させ、また「オオフィーリアに哀悼を捧げ続けている事を連想させるため、黒水衣を着る」）

後シテ・ハムレット（白地単狩衣）

前シレ・オフィーリア（宮内長官の娘 ハムレットの恋人。白水衣。蓮の花束）

後シレ・オフィーリア（浄化された姿。長絹。天冠に蓮の花を挿す）

ワキ・ホレイシヨ（ハムレットの親友・学者。白大口。水衣。ロザリオ）

間（マイ）・・・墓守り（シエイクスピア原作『ハムレット』に登場する墓掘りを墓守りとし、精神的な人物に改作。原作名優の役柄を継承したい。唐人の役のよつな扮装 側次）

囃子・笛 小鼓 大鼓 太鼓 地謡 後見

*

十字架（中に光量可変の電灯を入れる）を舞台大小前の上に吊るす。

開場時には点灯しておき、客電を落とす時に消灯。

「台詞」

名のワキ「これはデンマーク王子「ハムレット」の友人。ホレイシオと申す」者にて候。さてもハムレット殿下「みまかりてのち。御遺言にまかせ諸國を」巡り候。しかれども我は心に悔やむ事あり。久しくデンマークに「立ち帰らず候程に」。殿下の「御菩提をも申い。また殿下の思ひ人オフィーリア姫の御墓所をも詣ではせし」存じ候。

「急ぎ候はじ。」「わははやオフィーリアの御臺所に」

着きて候

正中に座して罷り

サシヨロ北政なる。わがテムマークの鳥々にも。春日やしやく訪れて。

風になびきて美しく。葦・桜草・金鳳花。咲き乱るるを眺むれ

ば。オフィーリア姫の在りし日の。御姿思ひ出ださるなり。かの人の野辺送りには。王妃も花を御手向けあって。「美しき人に美しき花々をこそ」とのたまひしも。この所にての事なるべし

このサシの間に十字架に少しづつ光を入れる。

下歌 ヲヨ「昔語の跡訪へば。殿下が今はの言の葉に。われを思はば後までも。わが物語を伝へよ。懐かしき思ひかな君懐かしき思ひかな

下歌の終わりにワキは脇座に行き着座

〔次第〕 やがて前シテ里人橋掛りに登場

次第 シテシヨ「生死の道に迷ひ来て。生死の道に迷ひ来て。憂き世に

光求めん

サシ「いづれか気高き心なる。残刃非道の世に耐えて生くる。

あるいは苦難の海に立ち回かひ。その患の根をよむめどか

下歌「死ぬるとは。眠るがよきものなるか。心の悩みも。その身が

生来受けし苦しみを。すべて断ち切れるものなれば。この世に

なぎ最期なり

サキ

上歌「死ぬるとは。眠るがじよきものなるぜ。眠るがじよきものなるぜ。眠れば夢を見るものを。いかなる夢を見るやらん。」

旅人帰らぬ国なれば。見えぬ果てに思ひ惑い。優柔不断の

タビヒトカヒ

ユウジュウフタン

そしりを受け。行ひの名を失ひぬ。生くる事とは何やらん。死する事とは何やらん。

上歌の終わり頃に十字架の光を段々に落とす

ワキ「不思議やな我ならで姫の御墓所に」詣で給ふ。御身は如何なる人ぞ

シテ「これはこの里に住む者にて」候が。オフィーリア姫「みまかりてのち。かの姫を悼みかやうに御墓所を」弔ひ参らせ候。くらん候へこの野辺一面なる董の「咲き乱れたるを。これは亡き人の」しるしの花にて候へ

ワキ「げにげに可憐なる董の今を盛りと」咲き乱れたるが。かの姫君の「しるしの花とは。いかなる」謂はれにて候や

シテ「さん候かの姫」野辺送りの御時。姫君の兄レアティーズ悲しみ給ひ「御申しありしは。カカル」君「これよりは董となるべし。」

董の花言葉は真心なればなりと。「トバ」それより巡る「春毎に。かやうに董の」咲き乱れ候。

下歌「思ひ出せばは痛はこせ。そのこころは清なりと。」

今はこの野にすみれ草。手回けの花がオフィーリア。一葉草
一夜草。再び見えぬ悲これよ

ワキ「げにげに兄君さやうに言ひし」御言葉は。我も「これにて」承りて候ひしよ。また承れば再び姫に見みえぬ事を「悲しみ給ふ。御身はいかさま」ゆかりの人か。なおなおオフィーリアのみまかり給ひし次第懇ろに「御物語り候へ

シテ 語「そもそもかの姫の思ひ人」ハムレット。おのが生死に

思ひ悩みて「ありけるが。父の亡霊」現れ給ひ。我が仇を

かたき

討ち取れと「命じ給ふ。かの人適はじとは」思ひ給ふが。父を「敬いてあれば。覚悟を定め」女に向かひ カカル「君尼寺へ行き給へと宣ひしが。コトバ「それよりして女は」狂気となり。つひに命を」失ひ給ひて候

ワキ「尼寺へ行けとは。心の友と仰せられし」我なりしだにも。

つひには知らぬ「御言葉なり。カカル「さては契りの絶へなん事を。姫は御嘆きありしよなふ

シテ「いやかの人はオフィーリアを真に」愛したれば。罪人となるべき御身の「行く末を思ひ。君尼寺にて清らかに暮らせとの」謂ひなりしが。

ワキ カカル「されども姫は悲しさに。狂気となりてただ一人。小川のほとりをさま迷ひ歩き。作り給ひし御花輪を。柳の枝に掛けんとすれば。枯れ枝折れて水の上。しばしは人魚の「とくにて。水面に浮かみ歌口すさみしが。やがて水底にはかなくも。

つひに見えずなり給ひしと。承りて候へども

シテ クトキ 中「それをば我は夢にも知らず。流されたりしインゲランドより。帰って見れば野辺の送り。かの墓に飛び込み

今一度 その面影を抱えつゝ

I loved Ophelia: Forty thousand brothers

Could not make up my sum.

(オランダ語より)「幾十万の兄あれど我が愛へつゝは勝るまじ」

地 シヨ「そのときかの敵。我を狂気とあやむけりて。墓より出だせ

よのついで。抱えつ事も叶はぬ。心も離れど。

メンソウの世をまじつゝももどき。思ひは残りて盟まひけんと悲し
き。 打切

「君。寂しさに耐えかねて。水の面にその身を投げけるか。

許し給へオフィーリア。許し給へやオフィーリア

イロエト(シテ扇を腰に挿し坐禪の態。はじめは大小マシライを打つ。ノリて笛

マシライを吹くとオフィーリア出る。十字架の光を次第に入れる。シ、シ

「近づく時シテも気つき座り直し面はかりにてシレを見る(体も心も向はぬ)。

シ、シ、シテの廻りを静かに歩み(シテもそれにつれて面はかりにてシレを見る)

シテはシトに合掌するとシレはシテに向かいあつて座。シテが手をほぐすと

シレは童の花束をシテに渡す。静かに右手をシテの額にかけず(シテは目を

ふさぐ)。大小。型を見て適宜シカケコノ戸を打つ。シレが静かに立ち上がり

幕に引くとシレ大小コノ戸はかり打つ。シテはその姿をしばし見送り、花束を

懐中してなおも瞑想の態にて正へ向き居る。シレ幕に入りて大小地。地シカケ、

コノ戸を打つ時。シテは居立ち扇を抜き持ち謡い出す。シレ幕に入るとき

十字架の光を落す)

シテ拍不合シヨ「生死はもはや。問ふまでもなし

拍不合シヨ「生死はもはや。問ふまでもなし。今か後にか春花の

下。^{もと} 秋月の宵。雀の一羽の天より落つる。これみなあまねく。摂理たるべし。この世にひとつの偶然なく。前兆あれは言ひくべし。過去も未来も。今この世に。覚悟がすべて。

今この時に。命懸く^{いのちか}べし。有限無限 夢幻幽玄。前世も^{ぜんせ}

来世も。すべてこの世に。生かして^{なま}悟りて悟りて生きて。

生かして悟りて。悟り生きて。この世の命を生くべきなり

「シテ中入り」

問狂言・喜劇守り登場

「醒め」 若し頃は恋もした。

廿二の昔も恋もした。

三十三の昔も恋もした。

噂の井波には戀するよこの世が。

返答はこれこそ井波海原よ。

この世の羅羅来むかいつれたれや。

この世にや。しや無常はなまじ。

ちんちん因果はなまのよ。

井波の世に恋はなまじ。

井波の世に恋はなまじ。

「この世も死後もほたこのごぢや。

「この世の醍醐味わかつてきたや。

語り「それがこは「この辺りの墓から」じゃぬ。かつて三十数年墓掘りを致して「じゃった。わし」その頃の事じゃぬ。宮内長官ボローニアス閣下の「息女、オフィーリア様の簡素な野辺送りが「じゃった。実はその後ハムレット殿下がお忍びにて再び詣でられたので「じゃぬ。」「たを存じ上げぬはそれがし一人なれば、それをわが胸に収めおくも落ち着かず。物語り致したく存する。

野辺送りのあり「翌日の」や。殿々と思しきお姿がオフィーリア様の墓前に見えられた。墓前にお座りになりひと時瞑想なされ。時折お涙を流された。その時「どこからともなくオフィーリア様と思しきお姿が現れて。静かに殿下に近づかね。背後より右手をかたし殿下を祝福しておられる如く「じゃった。やがてそのお姿は消えて。殿下もお帰りになられたので「じゃぬ。

「これはいかなる「こととも墓守りのそれがしは存じませぬが。それがし一人の見守りたることなれば。御物語り申しあげたる次第「じゃぬ。レアテイス様とフェンシングの試合をなされたのはその翌日の「じゃった。

【離れ】 「この世に「しんも偶然はなまじ。

すべて因果はあるものよ。

井坂の「じゃは「じゃ。

千由の命「しんが「じゃ。

「この世も死後もほたこのごぢや。

「この世の醜態わかってきたぞ。

この世で変わりや人生ハド。

それに気が付きやいのちは永遠

間場

「オオ、さてはハムレット殿下の幽霊」仮に現ね。われに言葉を

交はしけるぞや。サシ、今宵はここに仮寝して。なおも奇特を
拝まんと。やがて出づるや春の夜の。月待つ心も急ぐなり

(後ツレ音場)

「ツレセイ」浮かび得ぬ。身とて沈みし川面にも。今は浮かまん。

春の月

「ワキ カカル ヨホ合」不思議やな月澄み渡る川の面に。浮かみ出でた
る人影を見れば。まさしきオフィーリア姫にたましますか

「ツレ」我は水の面に身を投げて。この世を去りしオフィーリアなり。
我が思い人に契り絶えなん事を悲しみ。この世を去りしはか
なさよ。されどもかの人現れて。真の愛に包まれり

「ワキ」さては嬉しや御身ははや。殿下のみもとに参りたるぞ。さり
ながら我は殿下のお最期を。思ふにつけて今もなお。心痛み
て悔むなり

(ハムレット、幕の奥より。やがて姿を現す)

「ツレ合」何を言ふホレイシオよ。何を悔やみ給へるぞ。

「ワキ」また現れし御姿。ハムレット殿下にてましますか。君ソエ
ンシンダの御試合に。御胸騒ぎを覚え給ふに。とどめ得れら

し悔つれども

シテ「過ぎたる夢よホレイシオ。我を甲らふまでもなし。生死はもはや問ふに及ばず。君自らを救ひ給入

ワキ「生死は問ふまでもあらざらん。おもはば君の御心やいかにシテ「我生死の海を越え過ぎて。光の国に至りつ。真の愛を悟り得たり。

クリでシテは地謡の前より着座 シテは大小前に行き立ち座

クリ ヨウク「それ人類の精神進化。これ大いなる問ひならずや

地「今みな人は世界の市民。広きまなざし高き意識。トクシヨク

サシシテ「全人類の共生にこそ燃ゆるなれ 地「これ即ち人類の精神進化の証なり シテ「おのが自由や権利の主張 地「幸福追求

ツヨク 競い合ふは。いまだ進化の過程なり 打切

クセ 地「そもそも人間。おのれを主張し論争し。他を説き得べきものなるや。互ひの暮らし。価値や。信仰を認め合ひ。すべての民や文化をおもんばければ調和あり。

シテ「そのつえ互いに愛し合ひ融け合へば。地「新たなる美も生るべし。美しき思ひに美しきことば。思ひは行為に溢れ出で。これぞ誠の世界なる。想ひ新たに遣伝子新た。そのときトトは進化せり。万人の命輝く。もろともトトに生きる理。トト

〔大鼓コノ入〕

拍合「面白や

神樂(序ナシ、掛かりのみ) 大小太鼓は入り拍子打つ。

段となり、以下、早舞の初段となる。あと二段目

を抜いて二段ヤリヤリ入。

ワカシテ「幸せに。優るものなし。諸人のもろびと

ノル地「じゅふくそうちょう寿福増長。かれいえんねん仮齡延年を祈るなり

拍合シテ「生あるすべてをいとほしみ。宇宙のいのちが繋がると
ノルシテ「志高ければ 地「意図よきものに。結果出さへし

シテ「許し給へや 地「今はのきはじシテ「えらば往かん

地「永遠の国へ。この世は永遠のものならず。わねど形ある
唯一の国。我が思ひにて変はれる国ぞ。心を語り。このはを
行ひ。争はず。最期の仕上げは天命なりと

シテ「あとは静寂 地「あとは静寂。いま。気高き心が飛び立たれる。
靈魂世界へ。お休みなさい。麗しの王子よ。もう語られぬ。
天使の飛翔と。歌声に。いざなはれ導かれ。天使の飛翔と
歌声に。いざなはれ導かれて。安息世界に入り給ふ。安息
世界に入り給ふ

あとは静寂のあとにひた隠す王子衆に明かりを入れる

(なお、演能に際しては、せじぶ、演出その他、その場「な」にて適宜変更するものとし
ます)

